

本学創立者の1人相馬永胤ゆかりの重文横浜正金銀行 本店本館

創建100周年記念展覧会に本学の大学史資料を展示

本学創立者の一人、相馬永胤(そうまながたね)は、横浜正金銀行の取締役・頭取を務め、同行の発展に大きな役割を果たした。その本店新築に際して、設計を依頼したのが妻木頼黄(つまきよりなか)で、明治44年に竣工した本学創立30周年記念講堂の設計者でもある。本店本館創建100周年を記念して開かれる展覧会に、大学史資料課が『相馬永胤日記』、等の資料24点を提供している。

▽会期=7月24日(土)～9月12日(日)※月曜休館

▽会場=神奈川県立歴史博物館(横浜・馬車道)

【ニュース専修2004年7月号3面】

専大校友を訪ねて

「当たり前のこと」の積み重ね

「幻冬舎」でヒット作を飛ばすエグゼクティブプロデューサー
山口 ミルコさん(昭63文)



「小さなことを、コツコツ積み上げてきたってことでしょうか。特別なこと、何もしてないですよ」。五木寛之(『元氣』)、江國香織(『スイートリトルライズ』)、さくらももこ(『健康手帖』)など、作家から芸能人まで幅広い人脈を持ち、次々ヒット作を飛ばす気鋭の女性編集者から出てくる言葉は、意外にもごく当たり前の話ばかり。「実直に誠実に好きな道を究めたい」。その一心だ。

専大松戸高から専大文学部英米文学科を卒業後、外資系の損保会社に入ったが、ある出会いから角川書店の見城徹さん(現・幻冬舎社長)を紹介され、『月刊カドカワ』など角川書店の編集者を5年間経験した。「実際飛び込んでみるとそこは、想像を絶する世界。最初の頃は毎日叩かれて、泣いてばかり。精神的にも肉体的にも打ちのめされました」。しかし「その経験と、断念しないで続けてきたふんばりが、今の仕事に生きているのかもしれない」。

見城さんが独立したため、幻冬舎に移り10年。今最も「旬な」出版社のエグゼクティブプロデューサーとして企画、作家やスタッフとの折衝など多忙な毎日を送る。その間、常に寄り添うようにいたのがジャズだ。社会人ビッグバンドでアルトサックスを奏でる。そのつきあいは、専大時代、スウィングジャズ研究会での活動以前からで「食事をするように当たり前のこと」と表現する。

「学生時代の思い出? 特に大島良行ゼミ(現在名誉教授)の米国西部開拓史の講義は、楽しく聞きました」。授業が終わるとサックス、クラリネットを吹き、大好きなジャズに浸る毎日。「専大には、学生たちをおおらかに包み込んでくれる懐の深さがありました。ここでは、いろいろなことが出来るよって言われているようで」。

インタビューは終始、居心地が悪そうだったが、母校への思いを語る時は温かい空気がふっと流れ、女子学生のような笑顔を見せた。

【ニュース専修2004年7月号3面】